

勝林寺寺報



安樂声聞菩薩衆
人天智慧はがらかに
身相莊嚴みなおなじ
他方に順じて名をつらぬ

顔容端政たぐいなし
微妙體妙無極天
成無之身無極體
平等力を帰命せよ

この二首のご和讃（親鸞さまのおうた）は、
安樂国（お浄土）に参らせてもらつた人々、そ
のなかにはお釈迦さまの直弟子「声聞」さまや
いろいろな菩薩さま、それに天人もいます、も
ちろん人間もお参りしています。それの方々
の顔はせやお姿のすばらしいことがたたえられ
てあります。

これらの方々は、もと皆それぞれの世界から
来られた方々ですけれども、お浄土の阿弥陀如
来さまの「十方の衆生よ」とおよびくださる声
と、どんなだれでも分けへだてなく照してくださ
る平等の智慧の光のなかでは、如来のお光の
莊嚴を身に受け、それの身でありながら
しかもそれを越えた、たぐいないすばらしい輝
き微妙ながたに生れかわるのだというのです。
ですから、もはやお浄土には、如来さまの光
の中に採取された、如来さまと同じ、何のこと
よりもとらわれもない、全く自由そのものの体
になつた人々がいるのだけれども、今はまあ、
その出身地によつて声聞とか菩薩とか天人とか
人間とかよんでいるだけなのです。

ますこのようない意味のうたであると理解くだ
さい。

ところで、これは最近私の感動であります。
今年の秋のお彼岸は、めずらしく上天氣であ

りました。
お中日の夕陽は格別にも雄大であります。
西に傾いた真紅（しんく）の太陽は大空をあか
ねに染めます。そのあかね色のなかで、山も木も
人も、いつせいに真赤に照りはえます。
だれだつてそのとき、ついあの童謡をうたつて
します。

ギンギンギラギラ 夕日が沈む
ギンギンギラギラ 日が沈む
マツカツカツカ 空ノ雲
ミンナノオ顔モ マツカツカ
ギンギンギラギラ 日が沈ム

山も木も人も犬も、みんなみんな、あかねに染
まつたのです。みんなすばらしい美人になります
た。だれも同じかがやきに輝きました。

お彼岸は、お浄土のこと・お浄土へおまいります
るということはどんなことなんだろうということ
を観念想起するため、ちようどよい時節なのだと
よと、聖徳太子さまが始めてくださった行事だそ
うです。

ご本願には「十方衆生よ」とよびかけられてお
ります。

「衆生」というのは、人間だけではなくて声聞
も菩薩も、それから天人も、人間はもちろん山や
木や犬なども、みんなひつくるめて「衆生」とい
われるのです。

いま 生きてあるは
死すべき者の
有難きかな。



なぜ

お寺とつき合いが必要か

うちで法事をつとめた時お参りしていただき
たからご住職とは面識があるが、お寺には行つ
たことがないという人があります。また、お寺

の門前は通つたことはあるが本堂にあがつたこ
ともご本尊に手を合わしたこともないという人
もおられるようです。他宗ならいざ知らず、こ
れでは浄土真宗の門徒とは言えません。なぜな
ら、浄土真宗の門徒にとつて、祖先の仏事はあ
くまで第二義で、その仏事を縁として私みず
からがお教にあづかるよろこびを確かめ合うや
「聞法」（仏法の話を聞く）にこそ一番大切な
意義があるからです。

もちろん法事などで短いご法話をしてしま
すが、家の者は多忙でなかなか耳に入りません。
ですから聞法の道場たるお寺などに参つて、
じっくりお聞かせいたゞくことが大切です。

聞法のために、お寺の門は、いつも開かれて
いるのです。

また、四六時中、テレホン法話は聞くことが
できます。

（真宗と親しくてき合う本）

別修報恩

お彼岸もちがりますと、さすがに朝夕過
し安くなりました。農事ごとにご多端のおり
皆様いかがお過ごしでございましょうか。

さて、例年、私たち仏事・仏縁共催にて勤め
ております「別修（敬老）報恩講説」を下記のようにお勧め致し
たいと思います。

なにかとお忙しいことは存じますが、格別
のご協力をいただきますよう、ご案内かたが
たお願い申しあげます。

九月十一日

勝林寺仏教育習年会長

平野邦

松

藤川 貴恵

十月のこよみ



一日 横山守氏宅法事。仏事・仏教研究会

二日 十日講（善立寺）。網干専念寺報恩講法話

三日 山田博文氏宅法事

四日 「別修（敬老）報恩講」

五日 兵庫教連研究会・教区企画室（神戸）

六日 玉田会報恩講（勝林寺）

七日 前住職祥月命日

八日 近畿地区仏教婦人会大会（大連）

九日 高知県連研修会講師（高知）

十日 温泉津安樂寺報恩講法話

十一日 宮島寿賀雄氏結婚式

十二日 温泉津安樂寺報恩講法話

十三日 十六夜会（西方寺）

十四日 教区対応委員会（神戸）。本堂寺報恩講

十五日 平野穂氏宅法事。本堂寺報恩講

十六日 草津順光寺報恩講法話（滋賀）

十七日 同

十八日 長壽寺報恩講

十九日 善立寺・長壽寺報恩講

二十日 二十六日

二十七日 正勝講

二十八日 西平寺報恩講

二十九日 長壽寺報恩講

三十日 真覚寺報恩講法話

三十一日 真覚寺報恩講法話

三十二日 同

三十三日 同

三十四日 善立寺報恩講

三十五日 平野穂氏宅法事。本堂寺報恩講

三十六日 草津順光寺報恩講法話（滋賀）

三十七日 同

三十八日 長壽寺報恩講

三十九日 善立寺・長壽寺報恩講

四十日 二十六日

四十一日 正勝講

四十二日 西平寺報恩講

四十三日 長壽寺報恩講

四十四日 真覚寺報恩講法話

四十五日 真覚寺報恩講法話

四十六日 同

四十七日 善立寺報恩講

四十八日 二十六日

四十九日 正勝講

五十日 西平寺報恩講

五十一日 長壽寺報恩講

五十二日 真覚寺報恩講法話

五十三日 真覚寺報恩講法話

五十四日 同

五十五日 善立寺報恩講

五十六日 二十六日

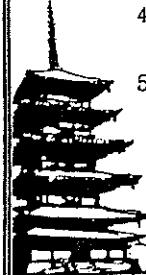
五十七日 正勝講

五十八日 西平寺報恩講

五十九日 長壽寺報恩講

六十日 真覚寺報恩講法話

六十一日 真覚寺報恩講法話



「衆生」を生きる



ろつてゐる、それだけなのだ」

昔から仏教では、私たち生きもののこと、人ひと（マヌシャ）とよび、またしばしば「衆生（しゆじょう）」（サットバ）といふ言ひ方でよんでまいりました。

「衆生」の「衆」という字は、たくさんのいろいろなという意味ですから、「衆生」といふのはつまり、いろいろな生き方・たくさんの生きようと訓うことありますよう。生きわかりやすく言えば、地獄とか餓鬼とか、または畜生とか、いろいろな生き方を生きていかなければならぬもの、それが私という人間なのだとということです。

「わたし、はじめてこのことに気づかさせていただきました。」

ある婦人がおつしやいます。

「このお氣の毒な寝たきり老人を、一生懸命看護してさしあげようと励めば励むほど、だんだんと恐ろしくなつて参ります。いろんな手をつくしてみても、この方の生きさまを抑えることはできません。」

「ある時期まつたく畜生そのものです。恥も外聞もありません。またあるときは、まるきり餓鬼です。がつがつ奪い取るようにしてたべます。」

「私、腹立たしくなつてしまします。悲しくなつてしまします。こんなに私してさしあげてるのに……」

「情なくなつて、悲しくなつて、そこでハツと氣付いたことがありました。人ひとではない、私たつてやがて、こんなにならなくてはならないのだ。いや、私はいまつとうに生きているのだけれど、ほんとは私、いまのこのいのちのなかに、この方と同じ地獄や餓鬼や畜生など、みんなこゝえて生きているのと違うだろうか。」

「若いちはたゞ、外聞がわるいとか体裁がわるいとか、なんとかそれらを抑え隠し取り繕う

う、この方を看病してあげるとか助けてあげるとかではなくて、この方といつしょに地獄を生きてみよう、餓鬼を一人で共に苦しませてもらおうと思うようになりました。おかげで、とつても気が樂になりました」

佛教で「衆生」とよぶのは、浅間しいもの、恐ろしいもの悲しいものをかゝえて生きていかなければならないお互いが、共にいつしょに生きいく世界です。

その「衆生」の、より処となろう「十方衆生よ」とよんぐださる阿弥陀如来のよび声が、「南無阿弥陀仏」のお念仏であるのです。



蓮如上人仰せられ候。

「信のうえは、とうとく思いて申す念仏も、

また、ふと申す念仏も

仏恩にそなわるなり。

他宗には、親のため、またなんのためなんどて念仏をつかうなり。

聖人のご一流には

弥陀をたのむが念仏なり。

そのうえの称名は

仏恩になるものなり

と仰せられ候。



幻燈「王舎城物語」上映

十月四日、『別修報恩講』です。

当日、劇画幻燈『王舎城物語』を上映します。

この『物語』はお釈迦様ご在世当時この城を中心に起きた人々の悲劇を題材に描かれたものです。この悲劇のまつたなかにいたイダイケという女性の苦悩を除く法として説かれたのが『仏説觀無量寿經』がありました。

私たちもイダイケといつしょにご説法に会いたいと思ひます。

今月のことば

人生における 苦しみは
すべて如來の 激励である

ではありません。

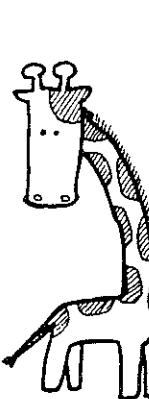
私たちには大きな悲しみで、大きな苦しみに打ちひしがれそうになった時、そこから立ちあがる勇気が湧いてくるのは、やさしい同情のことばを聞いたとき

でしようか、やさしいなぐさめのことばを聞いたときでしようか。決してそ

それは、自分の悲しみをわかってくれる人に出会ったときでしよう。自分の苦しい心を理解し、同感してくれる人に出合ったときではないでしょうか。苦く悩多き人の世を生きねばならなかつた親鸞さまは、その苦悩の重みを背負つて生きる自らを、智慧のまなざしでもつて理解して下さる人、慈悲の心をもつて共感して下さる人。そんな唯一の人に出会われたのです。

それは「苦悩の有情をしてむなしくすごさせることなき本願を、苦悩の有情の願いに先立つて建立された阿弥陀仏との大いなる出会いを果たされた親鸞さま。その

時、喜ばずにはおられなかつたのです。（出版部刊『眞実の世界』より）



納豆・豚ひき肉の炒めもの

◎材料（四人分）

納豆 二パック、豚ひき肉 二百g、長ねぎ（白い部分のみ）二本、レタス三分一個、しょうが一かけ、醤油、サラダ油各大さじ2

◎作り方

1、長ねぎはみじん切り、レタスは2cm幅にざく切り。しようがはすりおろしておく。
2、フライパンを熱しサラダ油を入れ、1の長ねぎ・豚ひき肉の順に加え、強火で炒め醤油で調味する。
3、器に1のレタスをたつおりしき、その上に2、を盛りつける1のおろししょうがを散らして出来上り。